

## 宮川裕之先生・居駒幹夫先生と共に歩んだ時間

宮川先生との仕事を振り返って（社会情報学部学科主任・教授 伏屋広隆）

社会情報学部の創設から十八年が経ちました。その間、宮川先生は、学部の形づくりに長く携わってこられました。特にこの八年間は学部長として、学部の発展のために尽力されてきたことに、感謝申し上げます。

宮川先生とは、社会情報学部が設置された当初に教務委員としてご一緒させて頂いて以降、しばらくの間はあまり共通の業務を担う機会はありませんでした。しかし、宮川先生が学部長に就任されて三年目の頃から、研究科教務主任、教務主任、学科主任として六年間にわたり主任会をご一緒することになり、次第に多くの仕事を共にさせて頂くようになりました。特に学科主任を務めていた時期には、同時に相模原キャンパスにいる日には、必ずと言ってよいほど打ち合わせを行っていたように思います。木曜三限はあらかじめそのための時間として空けており、毎週、議論を重ねる機会を楽しく持たせて頂きました。以下では、私が宮川先生との仕事を通じて感じたことを、三点に分けて述べたいと思います。

宮川先生との仕事で感じたことの一つ目は、「人が言っていることをよく聞く」という姿勢です。これは必ずしも「人の言うことを聞く」ということではありません。判断するのは自分であるが、まずは多くの意見に耳を傾けて幅広く情報収集をしようということだと理解しております。宮川先生は私が主任会に加わる際、私の役割として、多くの意見を言って会議を活性化させることを期待されているとおっしゃいました。当時の社会情報学部は会議で意見をしっかり主張する方が減ってきて、私から見ても元気がなくなってきていたので、これには強く共感を覚えました。近年は出来るだけ若手の先生も意見が言いやすいように、議事録の残らない学科会議を議論の場として皆の意見を広く共有する場、教授会はそれを受けて意思を決定する場という役割分担が機能していると思います。私自身、会議に臨むときに自分のスタンスを普通・意見多め・意見少なめの中から決めるのですが、この方針を受けて宮川先生のもとでの主任六年間は常に意見多めでやって参りました。多少やり過ぎた感もあり、主任会は常に延長気味であったことは申し訳ございません。

宮川先生との仕事で感じたことの一つ目は、「人材配置における適材適所・長期志向」です。適材適所と言うのは簡単なのですが、それを可能にするのは人をよく見る姿勢だと思います。宮川先生とお話をさせて頂くと、一人一人のことをよく見ておられていることが分かります。実は〇〇先生はこういった一面があって、この委員について頂ければその良さを引き出すことができるなどといった感じで、非常によく見ていらっしゃることに何度も実感致しました。私についても、一時期、学科会議や教授会で発言を控えていた時期がありましたが、議論において意見を述べることを持ち味としてきた自分にとって、前述の各会議での議論の活性化の役割は私の良さを引き出して頂いたと感謝しております。

長期志向の人材配置については、私が学科主任を務めていた時期に、特に諸委員等の業務分担をどのように行うかという点で、議論をさせて頂きました。社会情報学部は学部の規模が小さいため、教授会構成員も他学部に比べて少なくなってしまう。それに加えてセンター長など全学の要職に就かれる方も多いので、人材のやりくりは常に難しい課題でした。人材配置において、現時点での運営の安定性を重視するのであれば、その業務を得意とする方に継続して担当して頂くことが合理的です。しかし、担当期間が長くなるほど、その方が業務から離れた際の影響は大きくなります。一方で、数年後の運営を重視する場合には、これまで担当経験のない方にあえて担って頂き、担当可能な人材の裾野を広げていくことも重要になります。この2つはトレードオフの関係にあり、どうバランスをとるかは容易では

ありません。実際には、自分が責任者である間の運営の安定を優先し、前者に重きを置きがちになりますが、宮川先生は、ご自身が退任された後も学部運営が円滑に進むよう、一貫して後者のような人材の裾野を広げていく視点を大切にされていたように思えます。学部として余裕がある局面では、後者をより重視することが望ましいと感じますが、実際に運営に携わる中で、それを継続していくことは簡単ではなかったと思います。

宮川先生は、私を学科主任に任命される際、多くの方が学科主任を務められるように、業務や判断の考え方をできるだけ明文化しておいてほしいとおっしゃっていましたが、これも長期的な運営を見据えたお考えの一つだったのかもしれませんが。私自身も同様の必要性を感じていました。社会情報学部がスタートしてからの経緯を覚えている方が次第に減っていく中で、個々人の記憶に頼るだけでは、これまでの知見を十分に生かすことができません。そのため、学科主任に就く前の教務主任の時期に、業務に関わるルールや考え方を整理し、一定の明文化を進めてきましたが、もしそれを宮川先生が評価してくださり、学科主任としての役割につなげて頂いたのであれば、大変ありがたく思います。

宮川先生との仕事で感じたことの三つ目は、「学部・大学全体を経営的な視点で見ている」という姿勢です。ともすれば、各委員会での議論は、個々の立場からの意見が前面に出やすくなりますが、重要なのは全体を俯瞰する視点であり、それがあってこそ、主張にも説得力が生まれ、プレゼンスが高まります。また、大学の意思決定の場では、教育や研究の理想を重視した意見が多く出される一方で、限られた経営資源をどこにどのように配分するかという視点も不可欠です。その点で、宮川先生は、経営資源の配置を常に意識された判断をされていたように感じられ、私自身、その姿勢に強く共感しました。

宮川先生が学部長であった最後の二年は、ちょうど学部には困難な状況が次々と生じ、学部・大学全体の将来を二人で議論する時間が多くありました。経営的な視点で物事を見る感覚に共通する部分が多く、私にとっては楽しい時間でした。議論が数時間に及ぶときも多々あり、夜遅くになるとパフォーマンスが落ちないように脳の糖分補給に黒砂糖を頂いたことを覚えております。また、FD合宿の後に残って新学科の原案を練った際も、疲れを忘れるほど議論が盛り上がったことが、良い思い出として残っています。

二人で議論をする際には、私は自分の意見にかかわらず相手の立場で意見を言うカウンターパートを務めさせて頂きました。宮川先生はこれを「壁打ち」と表現されていましたが、そうしたやり取りを通じて、考えを一つ一つ整理し、練り上げていったように思います。今後も、学部にとっては難しい判断を迫られる場面が多いと予想されます。退任後もぜひ学部にお立ち寄りいただき、今度は残された私たちの「壁打ち役」として、折に触れて助言を頂ければありがたく思います。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

## 異分野融合の実践的プロジェクト（社会情報学部・准教授 大林真也）

居駒先生、ご退官おめでとうございます。

先生が本学に赴任される際のプレゼンテーションを拝見したのが、最初の出会いでした。当時の私は「専門も背景もこれほど異なる方と、今後関わる機会があるだろうか」と、失礼ながら自分とは遠い世界の方のように感じていたことを覚えています。しかし、その第一印象は、良い意味で鮮やかに裏切られることとなりました。

居駒先生と深く関わるようになったのは、私がコンピナーを務める「プロジェクト演習」でした。ア

カデミックな世界しか知らず（社会学者のくせに社会常識がなく）、実践的な講義の構成に四苦八苦し  
ていた私にとって、企業で数々のプロジェクトを完遂されてきた先生の知見は、まさに目から鱗が落ち  
るものばかりでした。プロジェクトマネジメントのノウハウや、チューターの成長にも気を配りつつ、  
チームのパフォーマンスを最大化する手法など、実社会の視点を取り入れたご助言は、純粋な研究者で  
あった私には非常に新鮮で、産チャレでの優秀賞常連という成果に繋がる大きな指針となりました。

こうした教育面での連携を支えていたのは、実は意外な知の共通点だったのかもしれませんが。先生の  
亡くなられたお義父様（社会学者）のご自宅に伺い、蔵書を段ボール五十箱分も譲り受けた日のことは  
忘れられません。情報系の実務家である先生が、実はマックス・ヴェーバーを愛読されていると知った  
時は驚きました。情報系の先生からこれほど多くのヴェーバーの書籍を譲り受けるとは想像もしておら  
ず、先生のバックグラウンドにある社会学への深い理解に、不思議な縁や親近感を覚えました。

この「実践と理論」の両輪があったからこそ、情報システム開発に「社会課題の解決」という文脈を  
与え、多分野の教員が連携する、本学部を象徴する「異分野融合型情報システム開発プロジェクト」へ  
と進化させることができたのだと確信しております。

専門領域も世代も超えて、私の言葉を真正面から受け止めてくださる先生の懐の深さ、そして何より  
教育に対する圧倒的なバイタリティには、常に敬服するばかりでした。先生と共に教育に携われた時間  
は、私にとってかけがえのない財産です。

これまでの多大なるご貢献に心から感謝申し上げますとともに、先生の新たな門出が素晴らしいものと  
なりますようお祈り申し上げます。

## 宮川先生・居駒先生のご退職によせて（社会情報学部・准教授 吉田葵）

本年度をもってご退職されるにあたり、心より感謝と敬意を表します。

先生方と一緒に数々の機会の中で、まず強く印象に残っているのが、ADPISA のプログラムで  
す。中でも、2021 年度の女性向けの IT リカレント教育を目的とした ADPISA-F では、IT 系の知識を  
これまで学んだことのない女性に対し、この分野に興味を持ってもらうための初学者向けプログラムを  
構想するという、挑戦的な取り組みでした。その立ち上げにあたり、試行錯誤を重ねながら少しずつ形  
にしていっていった時間は、私にとって非常に学びの多い経験となりました。導入していただいたデジタル刺  
しゅうミシンは、現在も多くのワークショップで活用しており、当時の取り組みが継続的な教育研究  
実践へとつながっていることを実感しています。ADPISA-F はその後 ADPISA-E へと発展し、さらに  
ADPISA 全体も規模と広がりを増すプロジェクトへと成長していく中で、引き続き「楽しく学べるプ  
ログラミング入門」の授業を担当させていただくなど関わり続ける機会をいただいていることを、大変  
うれしく思っています。

一方で、特に宮川先生には、私自身、至らない点やご迷惑をおかけしたことも少なくなかったと感じ  
ています。そのたびに、状況を受け止めつつ前向きに導いてくださった先生の姿勢に、何度も助けられ  
てきました。この場を借りて、改めてお詫びと感謝を申し上げます。また、学内での関わりにとどまら  
ず、Snow Academy を一緒にする機会をいただいたことも、印象深い思い出の一つです。宮川先生の  
滑りはプロ級で、まったくついていくことはできませんでしたが、その一方で、私のいわゆる「エンジョ  
イスキー」を温かく受け止めてくださいました。その寛容さに、先生のお人柄を改めて感じたことをよ  
く覚えています。

これまで賜りましたご指導とご尽力に改めて深く感謝申し上げますとともに、先生方のこれからの日々

が、穏やかで実り多いものとなりますことを、心よりお祈り申し上げます。今後も ADPISA や学部教育のさまざまな場面で、引き続きご一緒できる機会を楽しみにしております。

## 宮川先生・居駒先生に寄せて（社会情報学部・教授 南部和香）

宮川先生へ 宮川先生を一言で表すなら、サーバントリーダーです。まず相手に奉仕し、その上で導くという考え方にに基づき、メンバーの成長と幸福を最優先に考えながら、支援を通じて組織を成功へ導くリーダーのことです。とくに、組織やメンバーを導く力は卓越していて、物事の捉え方から目標設定、目標に至るまでのステップに至るまで、常に明確なビジョンを共有してくださいます。また、節目や変化をチャンスと捉え、いかに大胆に飛躍して新しい価値を創造するかを、常に考えていらっしゃるのではないかと感じています。こうしたリーダーシップやマインドに触れることで、私たちの中に隠れていたポジティブなマインドが呼び起こされ、結果として、困難な状況であっても前向きに捉え、挑戦するエネルギーが生まれてくるのだと思います。

このリーダーシップは、学生指導においても遺憾なく発揮されています。ひそかに「卒業請負人」と呼ばれているのをご存知でしょうか。卒業までの道のりが険しいと思われた学生を、見事な手腕でゴールに導くこと、数知れずです。宮川先生のあり方が際立っているのは、先生の関わりが背景にありながらも、当人には自分の意思で前に進んでいると感じさせる点にあると思います。気がつけば、自分の力で自転車を漕いでいる——そんな状態を、いつの間にかつuckingてくださっているのです。

また、大学組織全体についても非常によく把握されており、「この話ならこのネットワーク」「あの件ならこの人に相談」と、まるで頭の中に詳細な地図と電話帳があるかのようです。そして絡まった糸をはぐすように物事の交通整理をし、歩みやすい道を切り開いてくださいます。つねに穏やかに物事を推し進めていらっしゃいますが、その裏側には、綿密なプランと全方向への気配り、そして揺るぎないポジティブマインドがあります。最初は、さすが情報システムの先生だと思っていましたが、ほどなく宮川先生だけの特殊能力なのだと気づきました。正直、チートレベルの神スキルだと思います。さらに、長年にわたって磨きをかけてきた最高レベルのスキルですから、当然のことながら、並び立つ者はいません。

そんな宮川先生も、もうすぐご卒業です。その背中が見えている今のうちに、先生のアビリティとマインドを学び、可能な限り受け継いでいきたいと思います。そして、私が先生からしていただいたように、後に続く人たちの道を、少しでも明るく照らせる存在になれるよう努力していきたいです。

最後に、私の中で宮川先生といえば、何といてもピアノです。社会情報学部 10 周年イベントでの、岩井先生（トランペット）とのセッションは本当にかっこよかったです。そして早いもので、学部はもうすぐ 20 周年を迎えます。ぜひまた、先生のピアノを多くの人に聴いてもらいたいと思っています。必ずお声がけしますので、そのときのために、たくさん練習しておいてくださいね。

居駒先生へ 大変印象深かったのは、SSI オリエンテーションです。居駒先生は、いつも新入生に対して「社会情報学部を選んでくれてありがとう」とおっしゃいます。初めて壇上でお話しされているのを聞いたとき、受験を通して選ばれたのは学生というよりも、むしろ私たちの学部なのだと感じ、初心にかえる思いでした。良い学部であるとの自負はあるものの、慢心がなかったともいえません。この先も、選ばれる学部であり続けなければならないと、あらためて思ったことをよく覚えています。

選ばれるためには、私たちの学部の良さを多くの方に知っていただく必要がありますが、この点にお

いても居駒先生の多大なる貢献があります。居駒先生が中心的役割を果たしている履修証明プログラム ADPISA は、学部の設立趣旨に沿った社会人向け教育プログラムとして展開されています。つまり、学部の学びは、ADPISA を通して裾野を広げているのです。ADPISA へのニーズが高まるほど、そして修了生の声が広がるほど、大元である学部の学びも注目され、再評価されていくことでしょう。もともと社会情報学部は、社会人や保護者の皆さまから共感を得ている学部ではありますが、ADPISA を通して大人のファンをさらに増やしてくださることが、学部の社会的ニーズを一段と高めてくれると感じています。

居駒先生は、社会情報学部にとって初めての本格的な実務家教員だと思います。これまでも研究を通して大学教員と交流することはあったかと思いますが、ご自身が教員として過ごすことになってから感じた、企業と大学との文化の違いなどを、どのように受け止めていらしたのかと、今さらながら考えます。もっとお話をお聞きしていれば、中にいると気づかないけれど、学部の将来にとって重要な視点や示唆を得られたはずですね。こうして文章にししながら、後悔が押し寄せてきています。もうあと三か月しかないけれど、まだあと三か月あると思って、お話をお聞きしてみようと、今、決心しました（今さら感がありますが、どうぞお許してください）。

最後に、完全に個人的な話を三点、記しておきたいと思います。一つめは、大学院科目の担当者探しが難航していた際に、進んで引き受けてくださったことです。本当に、本当にありがたかったです。心の中で「ネ申！」と叫んでいました。二つめは、詳しいことは書けないのですが、怒号が飛び交うような状況の中でも、終始淡々と対応されていた姿がとても印象的で、心からカッコいいと感じました。そして三つめは、いつメンが卒業してしまうのが寂しい、ということです。居駒先生は、毎日朝から夕方まで大学にいらっしゃる印象でした。たいてい、合同研にコーヒーをとりいらっしゃるときにお会いしていたかと思います。私の中で勝手に「いつメン（いつものメンバー）」だと思っていたので、この日常が変わるのは、やはり少し寂しい気持ちです。でもこの気持ちを原動力に、居駒先生がいつでも帰ってこられる場所であり続けるためにも、選ばれる学部であり続けるための教育と研究を、一つひとつ丁寧に積み重ねていきたいと思っています。

## 宮川先生のご功績とお人柄に感謝を込めて（社会情報学部・教授 宮治裕）

宮川先生のことで一番に思い出すのは、いつも私の意見に耳を傾けてくださり、さまざまな相談にも親身にのってくださったことです。

宮川先生と私は同じ情報系の教員で、本学の情報科学研究センター（現在の情報メディアセンター）に所属した経験があります（勤務時期は異なります）。そうした共通点があるとはいえ、宮川先生が主体的に進められた社会人教育の構想や、所長として尽力された情報メディアセンターの改組案について、およそひとまわり年下で、当時まだ若輩だった私にも丁寧に説明し、意見を求めてくださったことを今でも鮮明に憶えています。私の意見が宮川先生のお考えと異なる点も少なからずあり、議論が平行線をたどることもありました。それでも先生は、ご機嫌を損ねるようなそぶりを一切見せず、常に穏やかに耳を傾けてくださいました。その誠実な姿勢と配慮の深さを感じたことを覚えています。

のちに、宮川先生から数えて二代後に所長を拝命いたしました。その際には、職員や所員との関わり方、センター運営における検討すべき事項や議論の進め方など、これまで経験の少なかった点について、折に触れて先生にご相談申し上げました。宮川先生は、学部長として多忙を極めるなかでも、その都度貴重なお時間を割いてくださり、押しつけではない形で温かい助言を賜りました。

さらに、宮川学部長のもとで主任を務める機会もいただきました。難しい課題が次々と持ち上がるなかで、自ら率先して行動し範を示されるお姿が印象的でした。原案を作成して遅くまで毎晩のように主任会を開かれ、翌日にはその問題対処にあたられ、最終的には教授会などで真摯に説明されたうえで、周囲の意見に耳を傾ける、そういった先生のお姿を間近で拝見しました。長く学部長を務められた背景には、その誠実で柔軟なお人柄があったのだと感じております。

これらのように、先生の穏やかなお人柄と、常に周囲を思いやるお姿から、日々多くのことを学ばせていただきました。これまでのご指導とご支援に心より感謝申し上げます。また、学部や大学運営に関する多大なるご貢献とご尽力に深く敬意を表するとともに、そのお力添えにより多くの場面で支えられてきたことを改めて実感しております。

これからもお元気で、どうか新しい日々をゆたかにお過ごしください。先生のますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

## 宮川先生・居駒先生への感謝と思い出（社会情報学部・教授 飯島泰裕）

宮川先生を初めて知ったのは、高等部から理工学部へ進まれた先輩としてのことでした。ただ、学年が4年違うため、高等部時代にはお会いする機会はありませんでした。実際にお会いしたのは、宮川先生が古谷野研究室の院生として、行動科学実験の助手をされていた時です。

この行動科学実験の授業では、会議の様子をビデオ撮影し、文字起こしを行い、文末表現で類型化して行動分析をするというものでした。練習課題は映画『十二人の怒れる男』。父親殺しの罪に問われた少年の裁判で、陪審員たちが一室で議論し、最終的に評決に至る過程を描いた作品です。証拠や証言は少年に不利で、陪審員の大半は有罪を確信していましたが、ただ一人、陪審員8番が無罪を主張し、固定観念を排して証拠を再検証するよう促します。その熱意により、陪審員たちの心が次第に動き、無罪判決に至るというストーリーでした。面白い内容でしたが、文字起こしは膨大で、先輩方のレポートを参考にしながら作業したことを覚えています。

後半の本番では、自分たちのディベートを撮影し、同様の分析を行いました。参考となるものがなく、すべて自力で進める必要があり、議論が白熱するほど分析は面白いものになるものの、文字起こしは重労働でした。その際、宮川先生の的確な指摘に大いに助けられ、感謝したものでした。

この分析手法は、企業研究所や大学でのコミュニケーション分析に大変役立ちました。重労働な文字起こしも、企業であれば、外注できましたから、その分、分析に専念できました。今なら AI で文字起こしが容易にできる時代になり、隔世の感があります。

当時、青山学院大学世田谷キャンパスでは大型コンピュータが IBM370/138 から NEC ACOS550 へ移行する時期でした。別棟にあった製図室の半分を改築して ACOS550 を設置しました。IBM370/138 は、経営工学科のフロアに、情報科学研究センターとして設置されていましたが、移転したので、その部屋の多くが、古谷野研究室になりました。このため、古谷野研究室は空調や床上げが整った快適な環境でした。古谷野教授の専門も事務システムや先端オフィスで、宮川先生はそこにいらっしゃる洗練された先輩という印象を覚えています。

その頃の先輩方はスキーやテニスに熱心で、昼休みにテニス、シーズンにはスキー旅行が盛んでした。私はスポーツが苦手で、テニスは付き合い程度、スキーは全くしたことがありませんでした。スキーの楽しさに気づいたのは、会社員になり 30 歳近くになってからです。私だけでなく、同学年の皆さんから、スポーツ万能な宮川先生は憧れの存在でした。

大学院卒業後は音信不通でしたが、再会は社会情報学部創設の打ち合わせでした。そして、青学に赴任後、間もなく、宮川先生は情報科学研究センター長として、情報メディアセンターへの改組に尽力され、現在の研究教育基盤となる情報システムを構築されました。かつて、IBM370/138 や ACOS550 の時代、他大学では CPU の計算時間に課金されていましたが、青山学院では、購入したものを眠らしておくのはもったいないと、課金されることなく CPU は使い放題でしたし、大学だけでなく高等部生も使い放題でした。これが「情報の青学」という定評を築きました。パソコンが主流となった現代ではその優位性は見え難くなってきているかもしれませんが、この改組は、その精神を現代に復活させる重要な一歩だったと思います。さらに学部長としてもリーダーシップを発揮され、学部の発展に大きく貢献されました。

居駒先生は、ソフトウェアの品質管理が専門と聞いておりますが、専門がちょっと異なるため、本学に着任される以前は存じ上げませんでした。着任された後、社会人のリカレント教育に注力され、素晴らしい教育コースを構築されました。その教育の一部は、社会情報学部の学部生にも開放され、当研究室の学生もそこで学んだことが、ゼミや卒業研究に役立っております。もちろん、学部授業も、我々が手の回らなかった情報系授業を担当され、人気授業となっていました。

学外では、神奈川県地域職業能力開発促進協議会（神奈川労働局の委員会で、厚生労働省が、神奈川県地域の企業や教育機関、ハローワークなどの関係者をまとめ、政策として、地域の実情に合った職業訓練の計画立案・実施・評価を行うための会議体）で、ご一緒しました。協議会の会長は、横浜国立大学名誉教授で労働政策が専門の三井逸友先生で、居駒先生は大学が行うリカレント教育の実務委員として出席され、飯島は情報政策の委員として出席していました。この協議会で、居駒先生は単に実務者としての経験からだけでなく、労働市場の将来を見据えた卓越した意見を常に発言され、感銘を受けておりました。

まだまだお元気なお二人には、今後も益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。これまで本当に有難うございました。

## 参考文献

- [1] 『十二人の怒れる男 (12 Angry Men)』 20 世紀フォックス 1957

1954 年に CBS で放送された同題のドラマ作品をリメイクしたものであり、監督をシドニー・メット、主演をヘンリー・フォンダが務めた。脚本はレジナルド・ローズ。